

万葉集3122番歌の「今日だに逢はむを」について

竹生 政資¹, 西 晃央²

An Interpretation of the Fifth Phrase of the 3122th Poem in Manyo-shu

Masasuke TAKEFU, Akihiro NISHI

要 旨

万葉集3122番歌は、通説では「心なき 雨にもあるか 人目守り ともしき妹に 今日だに逢はむを」と訓読され、「無情な雨だなあ、人目を気遣って逢うことの少ない妹に、今日だけでも逢いたいと思うのに」のように解されている。この歌の結句は、西本願寺本などには「今日谷相牟」とあるが、元暦校本・類聚古集などの古写本に「今日谷相乎」とあることから、通説では後者が正しいものとされ「今日だに逢はむを」と訓読されている。しかし本論文では、さまざまな点から再検討した結果、前者が正しく「今日だに逢はむ」と訓読し、「せめて今日だけでも逢おう」と解すべきことを提案する。

1. はじめに

万葉集3122番歌は巻十二にある36首の「問答歌」の中の一つである。巻十一と巻十二は、上古から奈良時代までの「相聞往来」（互いに消息を尋ねあう）の歌を集めたもので、そのほとんどが男女の恋愛感情を詠んだものである。本論文の目的は、万葉集3122番歌の結句について従来行われてきた訓釈を再検討し、その訓みと意味を確定させることである。そのためにまず、歌の内容（訓読文と原文）を新日本古典文学大系本に従って掲載することから始めよう^[1]。ただし、要旨でも述べたように、結句原文には「今日谷相牟」と「今日谷相乎」の二通りがあり、本論文の結論は前者であるが（詳細は第3節）、とりあえずここでは通説を紹介しておく。また、3122番歌はその前の3121番歌と問答形式になっているので、3121番歌もいっしょに示す。

12/3121 わが背子が 使ひを待つと 笠も着ず 出でつつそ見し 雨の降らくに

12/3122 心なき 雨にもあるか 人目守り ともしき妹に 今日だに逢はむを

【原文】無心 雨尔毛有鹿 人目守 乏妹尔 今日谷相乎

次に、3122番歌に関する先行研究の概要を知るために、代表的な万葉集注釈書に掲載されている訓読文、現代語訳、注釈を出版年の新しいものから順に掲載する。記載形式をそろえるため内容に影響を与えない範囲内で順序や記号表記などを一部変更し、漢字の旧字体は新字体で置き換えた。

¹ 佐賀大学 医学部 地域医療科学教育研究センター (takefu@cc.saga-u.ac.jp)

² 佐賀大学 文化教育学部 理数教育講座 (nishia@cc.saga-u.ac.jp)

①新日本古典文学大系^[1]

【訓読文】心なき 雨にもあるか 人目守り ともしき妹に 今日だに逢はむを

【現代語訳】無情な雨だなあ。人目を気遣って逢うことの少ない妹に、今日だけでも逢いたいと思うのに。

【注釈】歌末の原文、西本願寺本などは「牟」。元暦校本・類聚古集の「乎」に拠る。

②新編日本古典文学全集^[2]

【訓読文】心なき 雨にもあるか 人目守る 欠しき妹に 今日だに逢はむを

【現代語訳】気の利かない 雨ではあるよ 人目を憚って めったに逢ってくれないあなたに 今日こそは逢いたいの

【注釈】心なき——思いやりのない。月や雲、雨、あるいは花や鳥などが話し手の気持ちを察してくれないことを恨んで言うことが多い。○人目守る → 二五六三。ここは、良く言って慎重、悪く言えば愚図で、見ている者がじれったくなるような態度を表す。○乏しき妹——このトモシは、逢うことが稀である、の意。○今日だに逢はむを——せめて今日だけでも逢いたく思うのに。

※逢いに行きたい気持ちはやまやまだが、雨に妨げられて行けない男の弁解の歌。

③講談社文庫（中西進）^[3]

【訓読文】心無き 雨にもあるか 人目守り 欠しき妹に 今日だに逢はむを

【現代語訳】無情な雨だなあ。人の目をさけつつ、心ひかれる妻に今日だけでも逢いたいの。

【注釈】心無き雨にもあるか——詠嘆。○人目守り——モルは様子をうかがう。○乏しき——僅かの意で、たまにしか逢えない妻。

④万葉集註釈（澤瀉久孝）^[4]

【訓読文】心無き 雨にもあるか 人目守り ともしき妹に 今日だに逢はむを

【現代語訳】無情な雨であることよ。人目の隙を窺つて、稀にしか逢へない妹にせめて今日でも逢はうものを。

【注釈】心無き雨にもあるか——「無」の字、元、類（五・八〇）に「无」に作る。「雨にもあるか」は「雨にあるかも」と同じ。

人目守り——既出（十一・二五六三）。

ともしき妹に今日だに逢はむを——この「ともし」は少い意。稀にしか逢へない妹。「乎」の字、元、類、紀、陽、矢、京による。西、細と版本とに「牟」とあり、京（左に緒）「牟イ本」とある。元、陽、京、附、寛にケフダニアハムヲとあるがよい。類ケフダニアフヲ、西、紀ケフダニアハム、細ケフダニモアハム、京（左に緒）ダニモアハムとある。これも前（三一一九）の「在」と同じく、誤訓が誤字を誘うたと見るべき例である。

⑤日本古典文学大系^[5]

【訓読文】心無き 雨にもあるか 人目守り 欠しき妹に 今日だに逢はむを

【現代語訳】心無い雨であることよ。人目のない時を覗つて、稀にしか逢えない妹にせめて今日だけでも逢いたいの。

【注釈】人目守り——人目のない時をうかがって。○乏しき——稀にしか逢えない。

上に示した五つの先行研究は、第三句の訓みに関する細かい差異を別にすれば、訓読文および現代語訳ともにほとんど同じ内容であることがわかる。第三句については、注釈書②は原文「人目守」を「人目守る」と連体形で訓み、それ以外はすべて「人目守り」と連用形に訓んでいる。

次の第2節では、上に示した先行研究の問題点を指摘し、続く第3節でこれらの問題点を解決できる新しい解釈を提案する。

2. 先行研究における問題点

3122番歌に関する従来の解釈には少なくとも五つの問題点がある。まず第一の問題点は、結句の表記の問題である。多くの注釈書が底本としている西本願寺本などには「今日谷相牟」とあるが、元暦校本・類聚古集などの古写本に「今日谷相乎」とあり、通説は後者を正しいものとしている。すなわち、底本の「牟」を「乎」の誤字だとする。しかし、もしこの誤字説が正しいのであれば、万葉集中の膨大な数の「牟」の中に、ほかにも同じ誤写例（「乎 → 牟」の誤写）があってもよいはずである。そこで底本の誤写例を調べてみた。その結果、約560余ある「牟」のうち「乎」を「牟」に誤写した可能性があるのは、今問題の3122番歌を除くと、わずかに1例のみである。それは734番歌の結句「手二所纏牟」である。通説は句末の「牟」を「乎」の誤字だと見なし、「手二所纏乎（手に巻かれむを）」と改訂している。しかしこの問題は、姉妹編の論文でも詳しく議論しているように^[7]、底本の「牟」の方が正しい可能性がある。もしそうだとすれば、少なくとも底本という一つの写本の中で見る限り、約560余ある「牟」のうち「乎」を「牟」に誤写した例は一つもないことになる。ただし、ほかの誤写例として、「矣 → 牟」（161番歌）、「牟 → 幸」（595番歌）、「手 → 牟」（784番歌）、「牟 → 毛」（4403番歌）などはある。

一方、元暦校本・紀州本などの写本は、万葉集140番歌の結句「吾不恋有牟（あが恋ひざらむ）」の「牟」を「乎」に誤写している^[6]。誤写は筆写に携わった人の不注意によるものであるから、写本に異同がある場合いずれを誤字と見なすべきかは、同じ写本の中に同じ誤写例があるかどうかで判断すべきであろう。この観点に立つならば、底本には「乎 → 牟」の誤写の確例がなく、一方、元暦校本などには「牟 → 乎」の誤写の確例があるのだから、今問題の3122番歌の結句についても、元暦校本などの「今日谷相乎」の方を疑うべきであろう。

次に、第二の問題点は、万葉集に「むを」（助動詞「む」＋助詞「を」）という表現が全部で34例あるが（疑義のある3122番歌と734番歌は除く）、これらの中で「む」の表記が省略された例はないという事実である。すなわち、「手二母将卷乎（手にも巻かむを）」（729番歌）や「吾恋南雄（我は恋ひなむを）」（2767番歌）のように「むを」と訓読すべき所にはすべて「む」を明示する表記が用いられている。仮に通説の誤字説を認めて3122番歌の結句を「今日谷相乎」としても、「相乎」を「逢はむを」と訓むのは「異例」であり、もし作者が本当に「逢はむを」と訓ませたかったのであれば「将相乎」などと表記したと思われるのである。ただし、「む」の後に「を」が続かない場合には、「逢はむとき」を「相時」（140番歌）と表記したり、「後も逢はむと」を「後毛相跡」（740番歌）と表記するなど、「む」の表記が省略されることはよくある。

第三の問題点は、以下の二つの歌を比較することによって明らかとなる。以下では、議論の便宜上、3122番歌の結句として、通説ではなく、底本のもを採用する（カッコ内は原文、以下も同様）。

- 12/3122 心なき 雨にもあるか 人目守り 乏しき妹に 今日だに逢はむ（今日谷相牟）
 19/4279 能登川の 後には逢はむ（後者相牟） しましくも 別るといへば 悲しくもあるか

比較のため、二番目の歌（4279番歌）の初句と第二句を結句の後に移動して倒置させると、

しましくも 別るといへば 悲しくもあるか 能登川の 後には逢はむ（後者相牟）

となり、歌の構造は上の3122番歌とほとんど同じになる。すなわち、いずれの歌も「...もあるか...逢はむ」の構造をしており、前半部の「～もあるか」でいったん文脈が切れ、歌の後半部「～逢はむ」へと続いている。さて、ここで上の二つの歌の結句を比較すると、3122番歌は「今日谷相牟（今日だに逢はむ）」、4279番歌は「後者相牟（後には逢はむ）」であり、「逢はむ」に対する原文はともに「相牟」である。意味も、3122番歌は「せめて今日だけでも逢おう」、4279番歌は「後には（きっと）逢おう」と完全に対応している。そこでもし、通説のように、3122番歌の「牟」を「乎」の誤字だとして「今日だに逢はむを」と訓むのであれば、対応する4279番歌の「牟」もまた「乎」の誤字だとして「後には逢はむを」と訓まなければつじつまが合わない。ところが、4279番の「牟」については写本による異同がなく、これを「乎」の誤字だとする根拠がないから、さすがに通説もこの歌に関しては原文改訂をしていない。

以上のことから、3122番歌の結句は底本の「牟」の方が正しく、元暦校本などの「乎」の方が誤字である可能性が高い。この結果は、世の中の諺「一度あることは二度ある」のとおり、元暦校本などが万葉集140番歌で一度犯した過ち（「牟 → 乎」の誤写）を再び734番歌で繰り返し、さらに「二度あることは三度ある」の諺のとおり、3122番歌で三度目の過ちを繰り返したと考えれば、一つの写本の筆写に携わった同一人間の「癖」として納得がいくのである。

第四の問題点は、3122番歌の内容に関するものである。新編日本古典文学全集（前節の注釈書②）は、この歌について「逢いに行きたい気持ちはやまやまだが、雨に妨げられて行けない男の弁解の歌」とコメントしている。ほかの注釈書も雨のために男が女のもとに通うのを断念した歌だと解しているようである。しかし、万葉時代の男たちにとって、雨は女のもとに通うのを断念する理由には必ずしもならない。そのことは、次のような歌があることから明らかである。

04/0664 石上 降るとも雨に つつまめや 妹に逢はむと 言ひてしものを

さらに、今問題の3122番歌の後に続く二対の問答歌

12/3123 ただひとり 寝れど寝かねて 白たへの 袖を笠に着 濡れつつそ来し

12/3124 雨も降る 夜もふけにけり 今さらに 君去なめやも 紐解き設けな

12/3125 ひさかたの 雨の降る日を わが門に 蓑笠着ずて 来る人や誰

12/3126 卷向の 穴師の山に 雲居つつ 雨は降れども 濡れつつそ来し

の内容が、ともに雨の中を男が女のもとに通う内容になっていることは重要である。すなわち、万葉集が似た内容の歌をまとめて配置する傾向があることを考慮すると、今問題の3122番歌は、通説の解釈とは逆に、雨の中をあえて男が女のもとに通う歌だと解する方が自然なのである。実際、その方が、この3122番歌（男の歌）と問答歌の対をなす3121番歌（女の歌）

12/3121 わが背子が 使ひを待つと 笠も着ず 出でつつそ見し 雨の降らくに

の内容ともつじつまが合う。なぜならば、この女の歌は、「笠も着ないで」雨に濡れながら男からの使いを待っている、という内容であり、おそらく降っている雨も男が通えないほどの大雨ではないはずであり、また前の664番歌のような男がいることも考慮すると、「せめて今日だけでも妹に逢おう」と思っている3122番歌の男がこの程度の雨で通うのを断念したとは思えないからである。

最後に、第五の問題点は、結句「今日だに逢はむを」の意味のあいまいさである。通説の訓み方だと「せめて今日だけでも妹に逢おうと思っているのに」という意味になるが、「逢はむを」と意志・推量を表す助動詞「む」が用いられていることから、少なくとも作者が歌を詠んでいる時点では「妹に逢おう」と思っていることは疑いなく、しかし一方では、先に述べたように雨は必ずしも男が女のもとに通うのを妨げるわけではないから、この歌からは肝心の「せめて今日だけでも妹に逢いに行こう」という作者の思いがその後どういう結果になったのか、読者にはまったく伝わってこない。すなわち、この歌には明確なメッセージがなく、それゆえ歌の体をなしていない。どうしてこんな中途半端な内容の歌を相手の女に贈るのであろうか。歌の前半部に「無情な雨だなあ」とあるから、もし最初は妹のもとに通おうと思っていたのだけれど、後で雨のために行くのを断念したというのであれば、3122番歌は、例えば

心なき 雨にもあるか ともし(き)妹に 今日だに逢はむと 思ひしものを

というような内容の歌になるべきであろう(万葉集576番歌に「我が通はむと 思ひしものを」という類似表現がある)。これだと、「せめて今日だけでも逢おうと思っていたのに、雨のために断念した」という明確なメッセージが伝わってくる。

以上見てきたように、3122番歌に関する通説には少なくとも五つの問題点がある。単に表記上の問題のみならず、解釈された歌の内容も中途半端で、はっきり言って歌の体をなしていないと思う。しかしこれは、この歌自体のせいではなく、ひとえに万葉学者たちが歌の結句を底本の「今日谷相牟」から「今日谷相乎」へと改訂したことによる結果であり、底本どおり「今日だに逢はむ」と訓めば、上で指摘した問題点はすべて解決することができる。これについては次節で検討することにしよう。

3. 万葉集3122番歌の新しい解釈

この節では、まず結果を示し、その後で具体的な根拠を確認していくことにしよう。以下に3122番歌の原文、訓読、直訳、意識を示す。

【原文】 無心 雨尔毛有鹿 人目守 乏妹尔 今日谷相牟

【訓読】 心なき 雨にもあるか (しかれども) 人目守り ともしき妹に 今日だに逢はむ

【直訳】 心無い雨が降るなあ。しかしそれでも、人目を避け、めったに逢えない妹に、せめて今日だけでも逢いに行こう。

【意識】 世間の目がきびしくて、なかなか妹のところに行くチャンスがない、せっかく今日は前もって妹に逢う約束をしていた日なのに、あいにくひどい雨が降ることだなあ。しかしそれでも、何とかこの雨の中、人目を避けて、せめて今日だけでも、妹に逢いに行くことにしよう...今日逢っておかなければ、また何時逢えるかわからないだろうから。

上に示した新しい解釈の第一のポイントは、この歌の結句として、通説のように「今日谷相乎」ではなく、底本(西本願寺本)の「今日谷相牟」の方を採り、「今日だに逢はむ」と訓読することである。こう

することにより、前節で指摘した第一から第三の問題点はすべて解消する。

第二のポイントは、この歌の文脈が切れる第二句のあとに「しかれども」という「逆接」の接続詞を補って解釈する点である。この歌は第二句を境にして前後二つの文脈から構成されており、しかもお互いが「逆接」の関係になっている。したがって、本来であれば「しかれども」のような接続詞（万葉集中に14例ある）が第二句と第三句の間に挿入されるべきであるが、音数の制約のある短歌では、前後の文脈から明らかに逆接の関係だとわかるような場合には（読者の混乱を招く恐れのない範囲内で）接続詞が省略されることがある。実際、今の歌と同じように逆接の接続詞が省略されたと思われる例がほかにも存在する。一つは前節にも示した次の歌である。

19/4279 能登川の 後には逢はむ しましくも 別るといへば 悲しくもあるか

この歌は二句切れであるが、歌の前半部と後半部を倒置させると、

しましくも 別るといへば 悲しくもあるか 能登川の 後には逢はむ

【大意】 しばらくでも別れると言え、本当に悲しいことだ。しかしそれでも、後には逢おう。

となり、歌の構造が今問題の3122番歌とほとんど同じになる。また、歌の意味も、「しかれども」という接続詞を補うことによって歌の前後の文脈が完全につながる点も同じである。もう一つ別の例を示そう（この歌の前にある長歌にも似た表現がある）。

03/0380 木綿たたみ 手に取り持ちて かくだにも 我は祈ひなむ 君に逢はじかも

【大意】 木綿畳を手に取り持って、せめてこんな風にしてでも（あなたに逢えるよう）神に祈ろう。しかしそれでも、（なかなか）あなたに逢えないことだなあ。

ここでは終助詞「か」の代わりに「かも」が用いられているが、用法は3122番歌や4279番歌の場合と同じく詠嘆である。この歌では第四句の後に「しかれども」の接続詞が省略されている。また、380番歌では「かくだにも我れは祈ひなむ」と「だに…む」が呼応し、3122番歌でも「今日だに逢はむ」と「だに…む」が呼応している点でも同じ構造になっている。

第三のポイントは、前節で第四・第五の問題点として指摘したように、3122番歌の作者がなぜ「雨の日」に「せめて今日だけでも逢おう」と言うのかである。その答えは、おそらく、世間のきびしい目があるために妹と逢う機会が少なく、あらかじめ逢う予定にしていた日がたとえ雨でも、その日に逢っておかなければ、また何時逢えるかわからないからであろう。このような解釈は、万葉集の歌の中に、妹との約束を果たすために雨の中を妹のもとに通う歌があることや（前節の664番歌）、3122番歌に続く二対の問答歌（前節の3123～3126番歌）がともに雨の中を女のもとに通うという内容であることともつじつまが合う。なお、3122番歌の作者が、世間のきびしい目があるために妹と逢う機会が少ないことは、歌の中に「人目守り」や「ともしき妹」という表現があることからわかる。

以上で述べたこと以外にも、この歌の重要なポイントである「なぜ雨の降る日に逢うのか」という問題を考える上できわめて参考になる歌がある。

11/2682 韓衣 君にうち着せ 見まく欲り 恋ひそ暮らしし 雨の降る日を

この歌については、今問題の3122番歌との内容的な関連性も含めて、姉妹編の論文で詳しく議論しているのでそちらを参照されたい^[8]。

最後に、新編日本古典文学全集（前節の注釈書②）は、第三句に対する注釈で「ここは、良く言って慎重、悪く言えば愚図で、見ている者がじれったくなるような態度を表す」とコメントしている。このように、通説では、この歌の作者を「愚図」と見なければ歌の文脈を理解できないが、上に示した新しい解釈では「愚図」どころか、あえて雨の中を妹のもとに通う「ひたむきな万葉人」の姿であり、約1300年を経た現代の私たちにとってもなお十分に共感できる内容になっている。

4. おわりに

本論文では、万葉集3122番歌の特に結句に焦点をあて、その訓釈について再検討を行った。その結果、これまで通説とされてきた元暦校本・類聚古集などの表記「今日谷相乎」は「牟」を「乎」に誤写したもので、西本願寺本などにある「今日谷相牟」の方が正しく、「今日だに逢はむ」と訓むべきことを提案した。また、この歌はいわゆる「二句切れ」であるが、第二句と第三句の間に「しかれども」という接続詞が省略されていることを指摘した。以上の二点に留意して解釈することにより、従来訓釈に含まれる問題点はすべて解決できることを示した。本論文で示した訓釈がはたして妥当なものであるかどうか、多くの方々のご批判をおおぎたい。

参考文献

- [1] 「万葉集 三」、新日本古典文学大系、岩波書店、pp. 193-195、2002年。
- [2] 「万葉集③」、新編日本古典文学全集、小学館、p. 358、1995年。
- [3] 「万葉集 原文付全訳注（三）」、中西進、講談社文庫、pp. 156-157、1980年。
- [4] 「万葉集注釋 卷第十二」、澤瀉久孝、中央公論社、pp. 223-224、1963年。
- [5] 「万葉集 三」、日本古典文学大系、岩波書店、pp. 310-311、1960年。
- [6] 「万葉集注釋 卷第四」、澤瀉久孝、中央公論社、p. 540、1959年。
- [7] 竹生政資・西見央、万葉集734番歌の「手に巻かれむを」について、佐賀大学文化教育学部研究論文集、第16集第1号、pp. 27-33、2011年。
- [8] 竹生政資・西見央、万葉集2682番歌の「韓衣君に打ち着せ」の解釈について、佐賀大学文化教育学部研究論文集、第16集第1号、pp. 43-49、2011年。